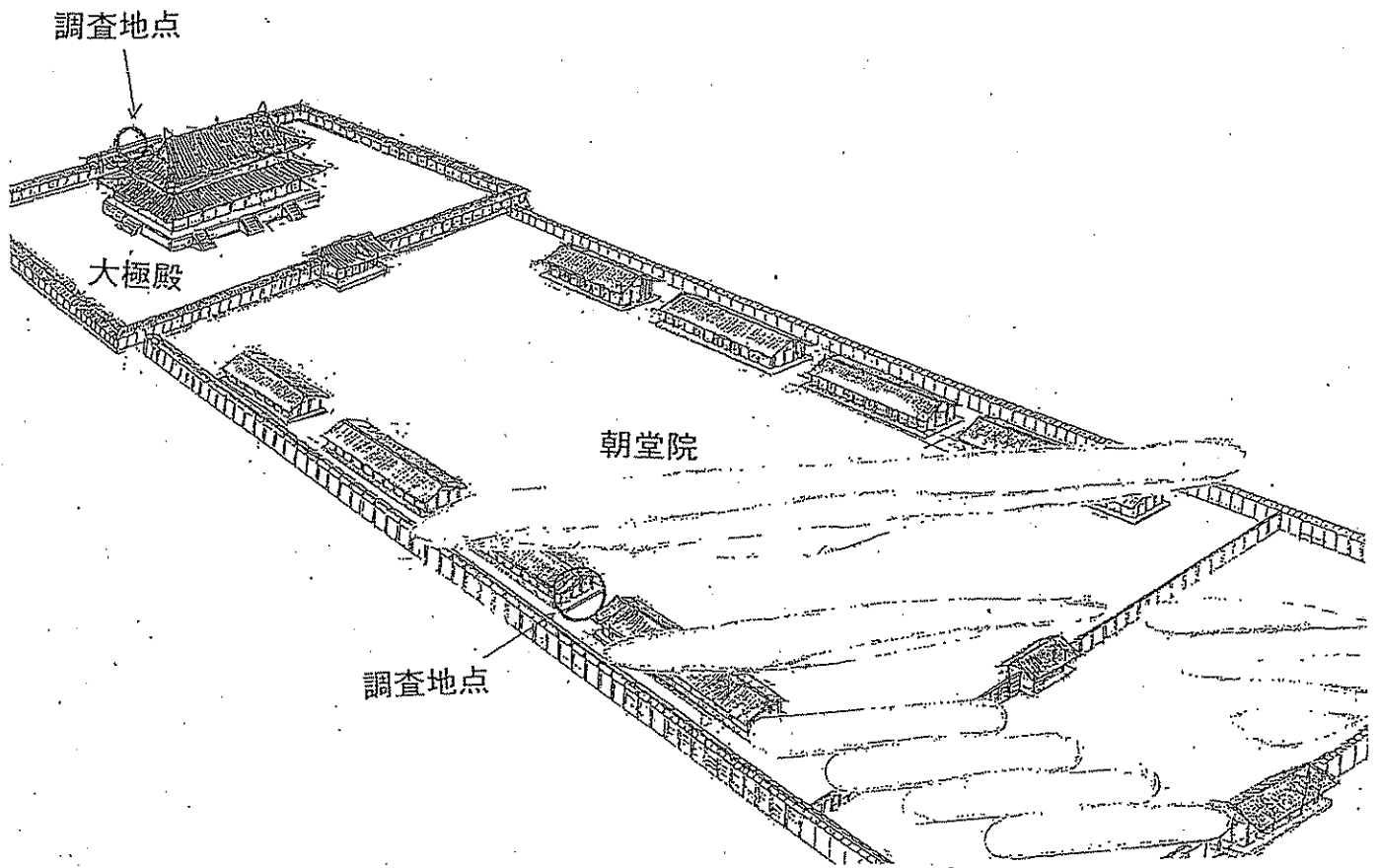


平成20年度
くにぎゅうあと
恭仁宮跡発掘調査
現地説明会資料



恭仁宮跡推定図（南西から望む）

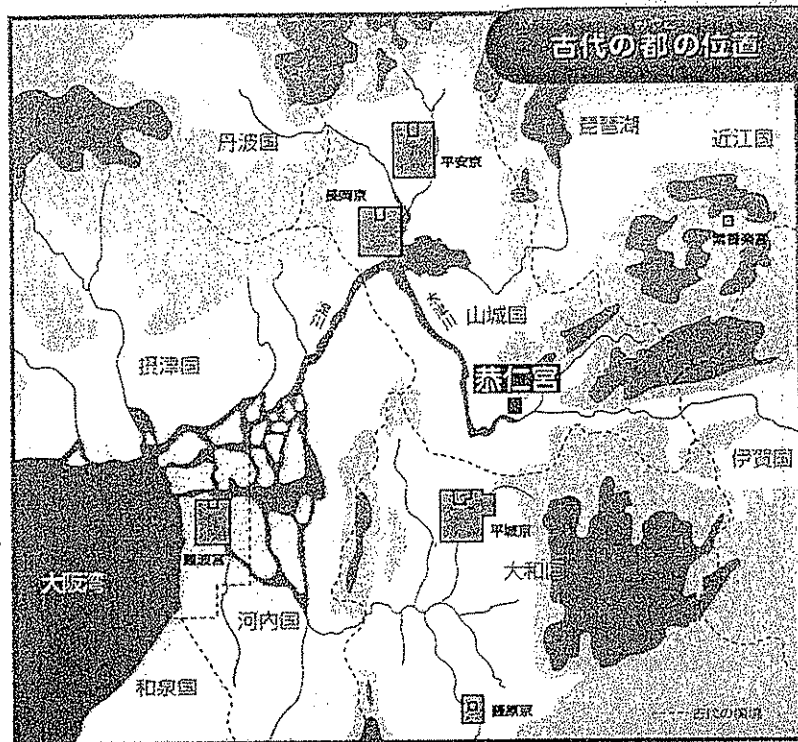
京都府教育委員会
平成20年11月29日(土)

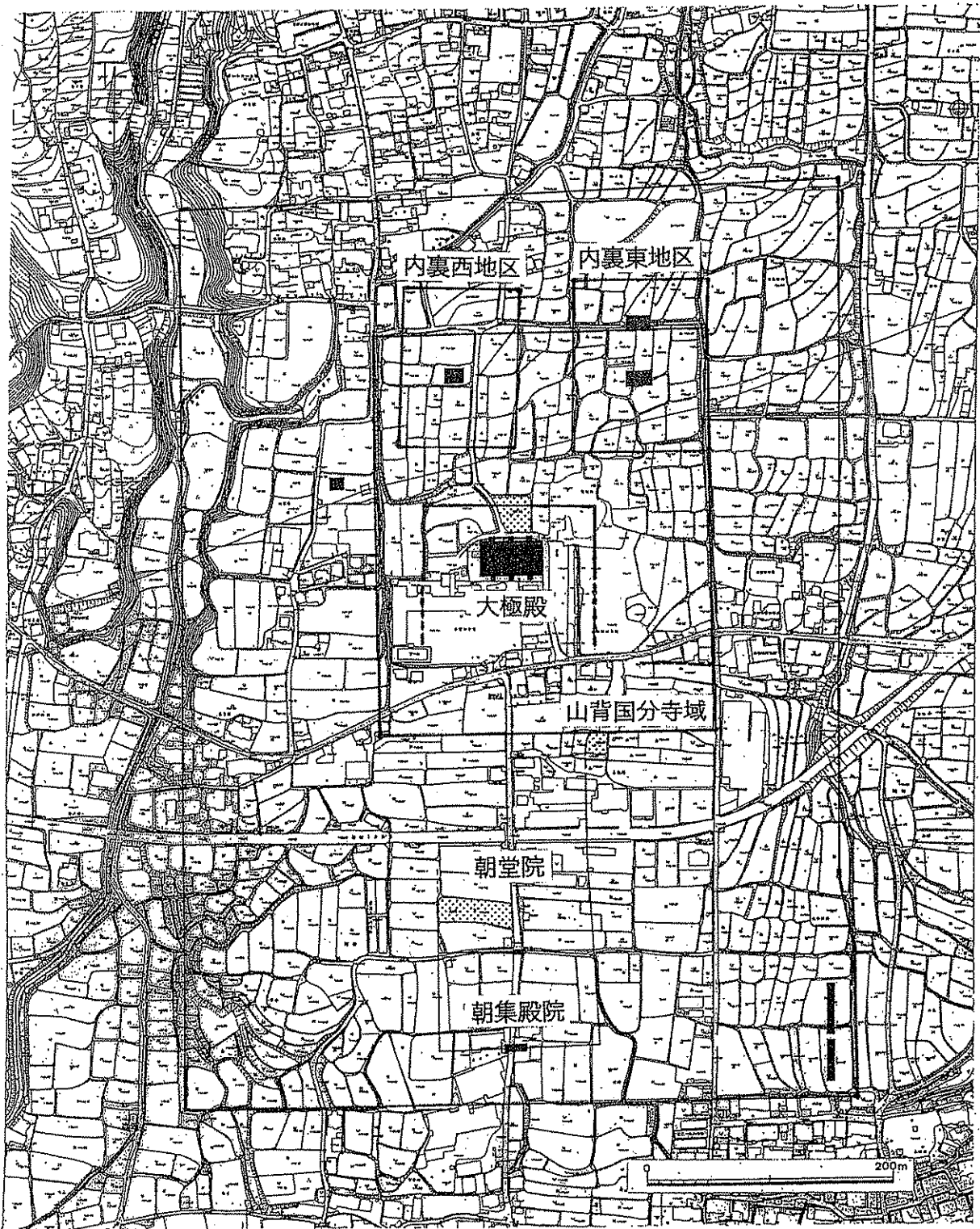
はじめに

京都府内には、古代に平安京、長岡京、恭仁京という3つの都が造られました。京都市の中心部に造られた平安京は、延暦13(794)年から明治元(1868)年に首都が東京に遷るまでその役割を果たした、いわゆる「千年の都」です。また、平安京に都が遷される直前の延暦3(784)年からの10年間は、向日市・長岡京市・京都市・大山崎町にかけて造られた長岡京がこの国の中心でした。

そして、この3つの中では最も古く、今からおよそ1270年前の天平12(740)年に、聖武天皇により、木津川市の加茂町、山城町、木津町にわたって造られたのが「恭仁京」、その中心となるのが、加茂町瓶原に造られた「恭仁宮」です。

宮の中には、主に天皇が暮らし、さまざまな儀式などが行われた内裏だいりや、政治や国家の儀式などが行われた大極殿だいごくでんや朝堂院ちやうどういん、さらには役人達が仕事を行った役所(官衙かんが)など、国の中でも最も重要な施設が造られました。恭仁宮を中心とする木津川市の一帯は、短期間ながら国の首都となっていたのです。しかし、そのわずか4年後の天平16(744)年には、都は大坂の難波宮なにわのみやへと移され、さらには平城京へと戻されることとなりました。恭仁宮は短い役目を終えた後、天平18(746)年に山城(山背こくふんじ)国分寺へと造り替えられました。





第1図 恭仁宮全体図 (S=1/5,000・アミカケが調査地点)

※ ■はこれまでに見つかっている主な建物跡

これまでの調査でわかっていること

恭仁宮跡での発掘調査は、昭和 48 年度から、京都府教育委員会が、そして昭和 61 年度からは旧加茂町教育委員会(平成 19 年度からは木津川市教育委員会)も行っています。

これまでに大極殿や内裏の建物跡などがいくつか見つかかり、宮の中がどのようになっていたのか少しずつ分かってきました(第 1 図)。宮域は東西に約 560 m、南北に約 750m の大きさで設計され、その周囲は背の高い土塀(築地塀)で囲まれていたことも分かりました。

大極殿は、宮の中心から少し北側に造られており、高さ 1 m を残す大きな土壇の上に築かれた東西が 45m、南北が 20m もある大きな建物でした。柱を大きな石材(礎石)の上に建てる礎石建物で、北西と南西の隅に使われた礎石は、奈良時代のままの位置にあることが調査により分かりました。

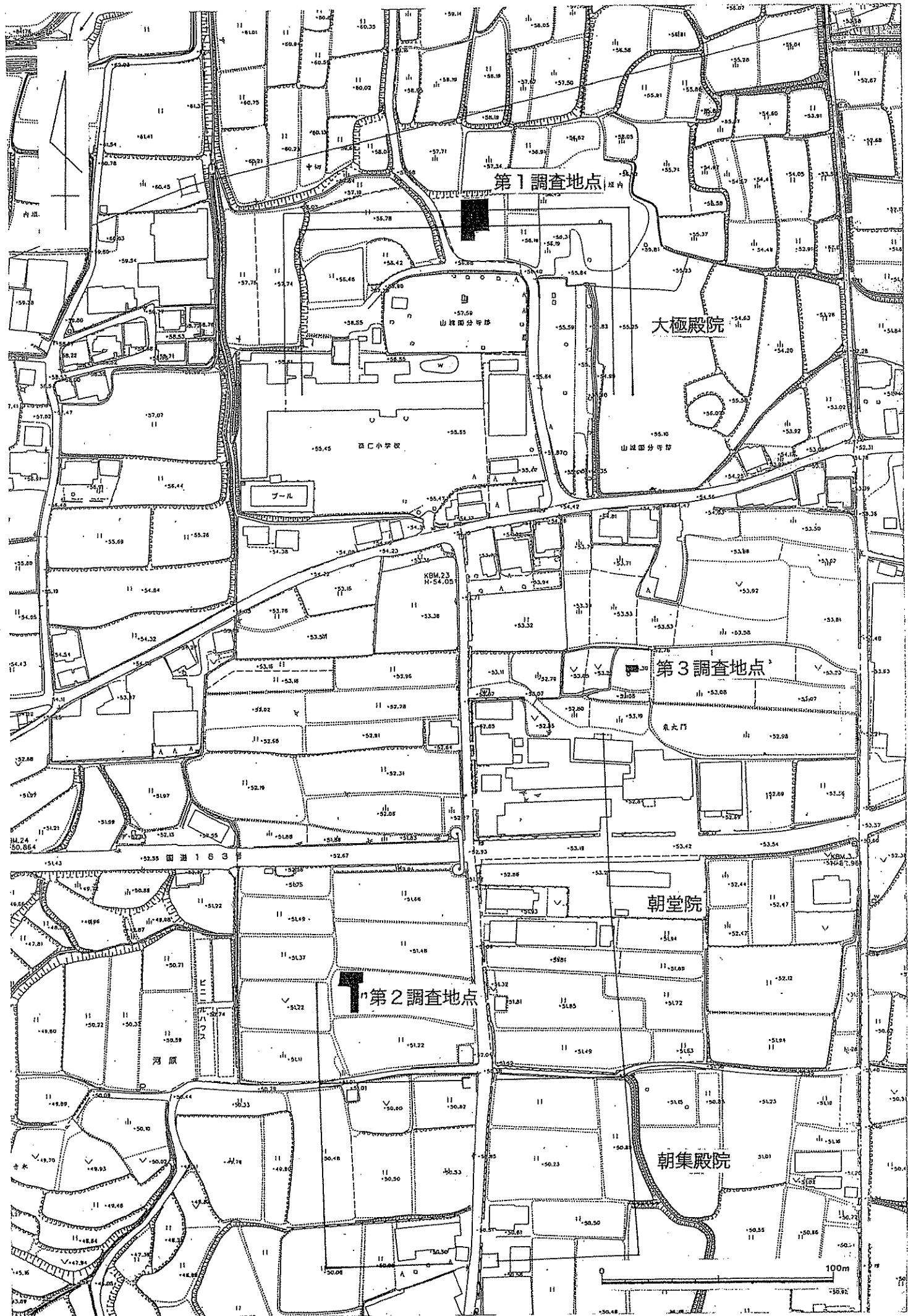
大極殿院を取り囲む回廊は、西側と北西隅部が見つかっています。回廊は築地を中央に配する複廊形式のもので、『続日本紀』に記載されていたとおり、平城宮(第 1 次大極殿院)に造られていた築地回廊が、恭仁宮へ移築されていることが確かめられました。

大極殿の北東では東西約 43m、南北約 12m もある大きな掘立柱建物も見つかっています。また、大極殿の北側には、塀で囲まれた内裏と考えられる区画が東西に 2 つ並ぶことも分かっています。このような構造は、他の都では見られない恭仁宮だけのもので、この 2 つの区画をそれぞれ「内裏西地区」・「内裏東地区」と呼んでいます。「内裏西地区」は、周りが全て板塀(掘立柱塀)で囲まれた、東西約 98m、南北約 128m の大きさです。「内裏東地区」は北側が板塀(掘立柱塀)で、残る南側、東側、西側は土塀(築地塀)で囲まれた、東西約 109m、南北約 139m の大きさで、「内裏西地区」より一回りほど大きく造られていることがわかっています。

朝堂院では、これまでその周囲を区画する板塀(掘立柱塀)が確認されていたほか、南側に造られていた 2 つの門(朝堂院南門と朝集殿院南門)も見つかっています。

今年度調査の目的

今年度の調査は、①「大極殿院地区」の中で、大極殿の北側に「後殿」があったのか確認すること、②「朝堂院地区」で朝堂の建物跡を見つけること、③



第2図 調査地点位置図 (S = 1/2,000)

「大極殿院地区」と「朝堂院地区」の境界付近でそれぞれの地区を区画していた塀跡を見つけることを目的に行いました。

今回の調査で分かったこと

○第1調査地点（第3・4図）

「大極殿院地区」で、大極殿の北側に「大極殿院後殿」が建っていたのか、大極殿院回廊がめぐっていたのかを確認するために調査しました。

これまでの調査で、「大極殿院地区」では、大極殿と大極殿院回廊が見つっています。これは、奈良時代のことを記録した『続日本紀』という歴史書にも平城宮の大極殿と大極殿院回廊の一部を解体して恭仁宮へ運んだという記載があることと合致しています。ただ、平城宮の「大極殿院後殿」は、都が恭仁京へ遷ったあとも平城宮に残されていたことが発掘調査で明らかになっているので、恭仁宮に「大極殿院後殿」が設けられたかどうか、まったく手がかりがありませんでした。

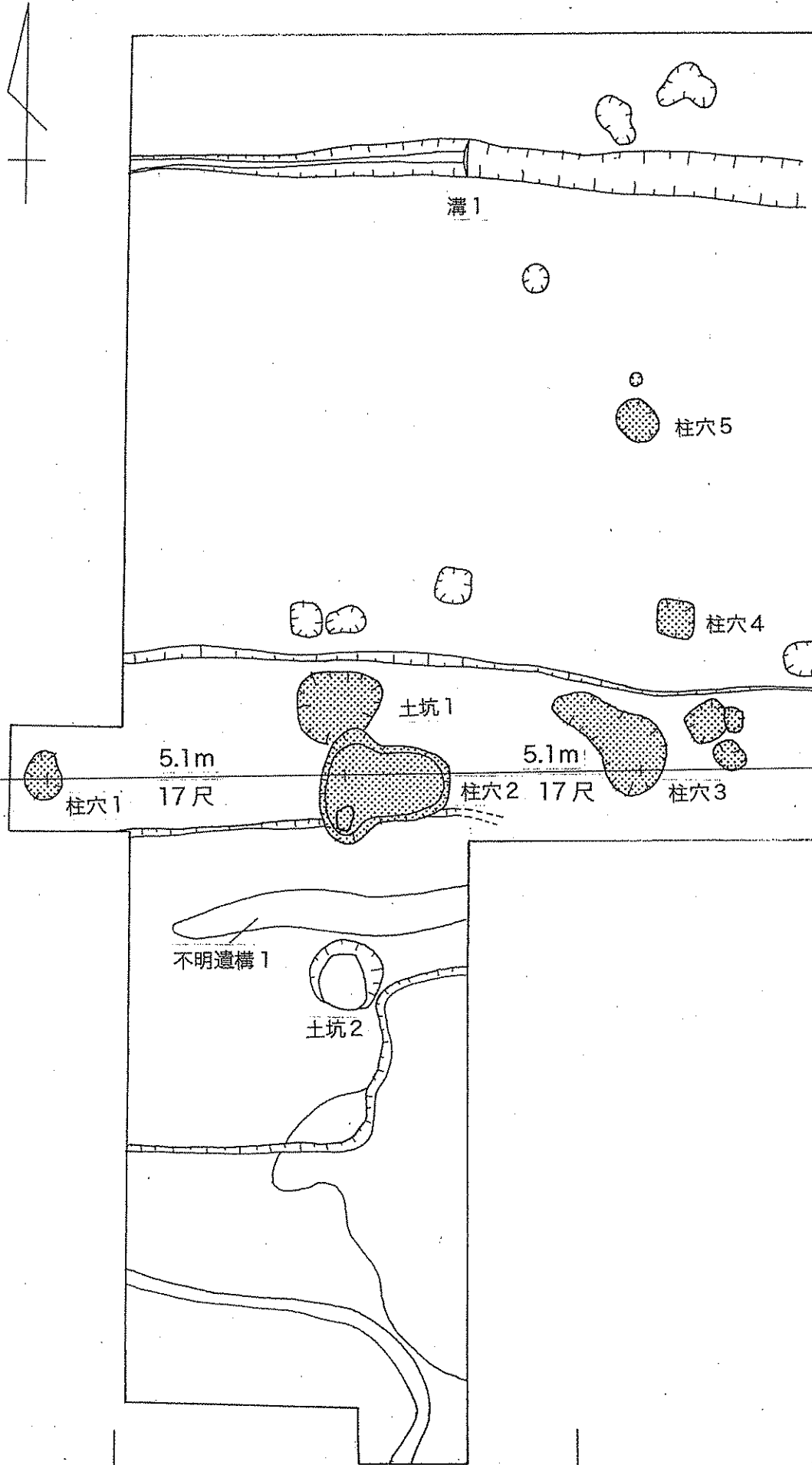
今回の調査では、東西に約5.1mの間隔で並ぶ柱穴3基（建物1）を確認しました（当時の物差しは約30cmですので、柱間の距離はその倍数になっています＝17尺）。この柱穴の間隔は、大極殿の柱間距離と同じだというだけでなく、その柱筋も揃っていました。このことから、今回見つかった柱穴は、大極殿の建物と同じ計画線によって造られた建物の柱穴であると考えられます。

しかし、残念ながら今回の調査では、柱穴は1列分しか見つかりません。その他の柱穴は後の時代の耕作などで失われてしまったと考えられます。特に、この地区は、恭仁京から難波京へ都が遷されたあとも国分寺として利用された場所のため、この建物1が恭仁宮よりも後の時期の建物である可能性もあります。ただし、①今回見つかった柱間距離は大極殿の柱間距離と同じである、②今回見つかった柱筋は大極殿の柱筋に沿っている、③後殿がない場合に見つかるはずの大極殿院回廊の柱穴や雨落ち溝が見つからない、という3つの理由から、今回見つかった3基の柱穴は恭仁宮の大極殿院後殿の柱穴である可能性が高いと考えられます。

この柱穴の位置と、これまでの調査で見つかった大極殿院回廊の位置を重ねてみると、恭仁宮の大極殿院後殿は平城京の第2次大極殿と同じく、回廊と一体となったものだった可能性が考えられます（第4図）。回廊と一体となっ

Y=-12,380

Y=-12,372



X=-137,208

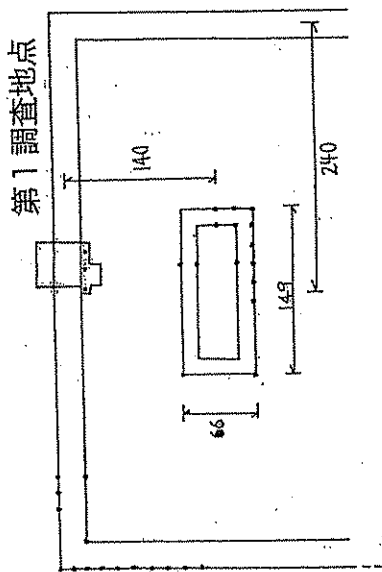
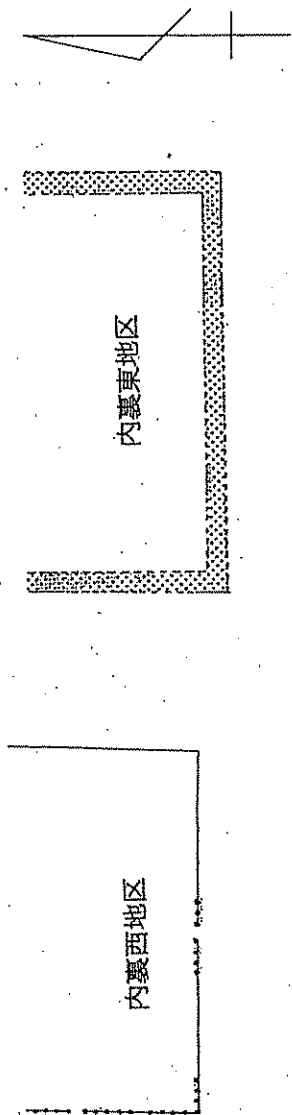
X=-137,216

建物1

X=-137,224

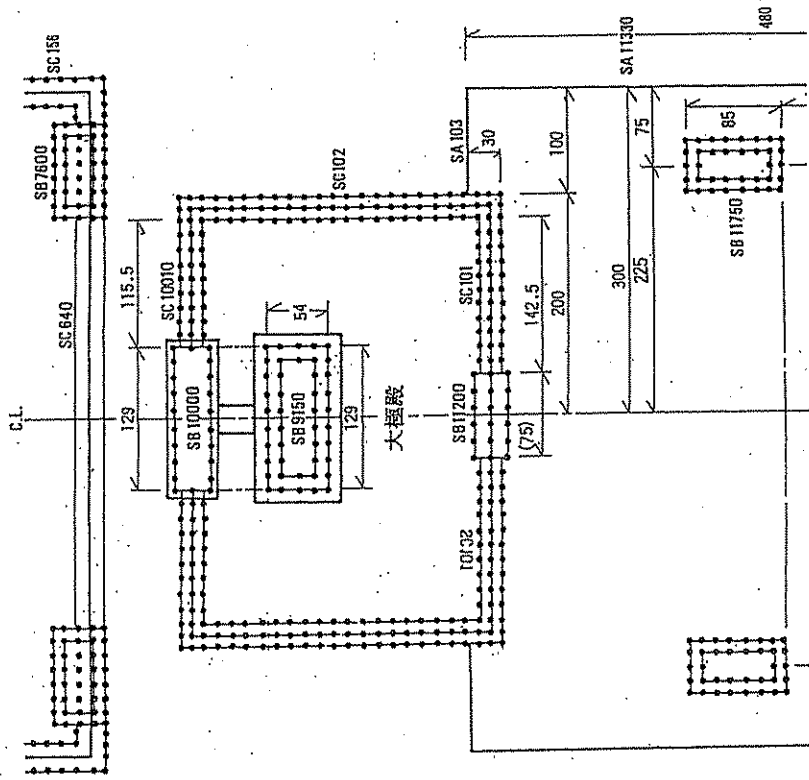
8m

第3図 第1調査地点遺構平面図 (S=1/100)



大極殿院回廊

恭仁宮大極殿院



第4図 恭仁宮跡と平城宮跡第2次の大極殿院の比較 (S=1/2,000)

た大極殿院後殿は、天皇が「内裏」から「大極殿院」へと入場する門の役割も担っていたと考えられています。今後は、大極殿院後殿の規模や構造を知るために、さらに周辺の調査を進めていく予定です。

○第2調査地点（第5・6図）

「朝堂院地区」では、これまで見つかっていなかった「朝堂」の建物を見つけるための調査を行いました。

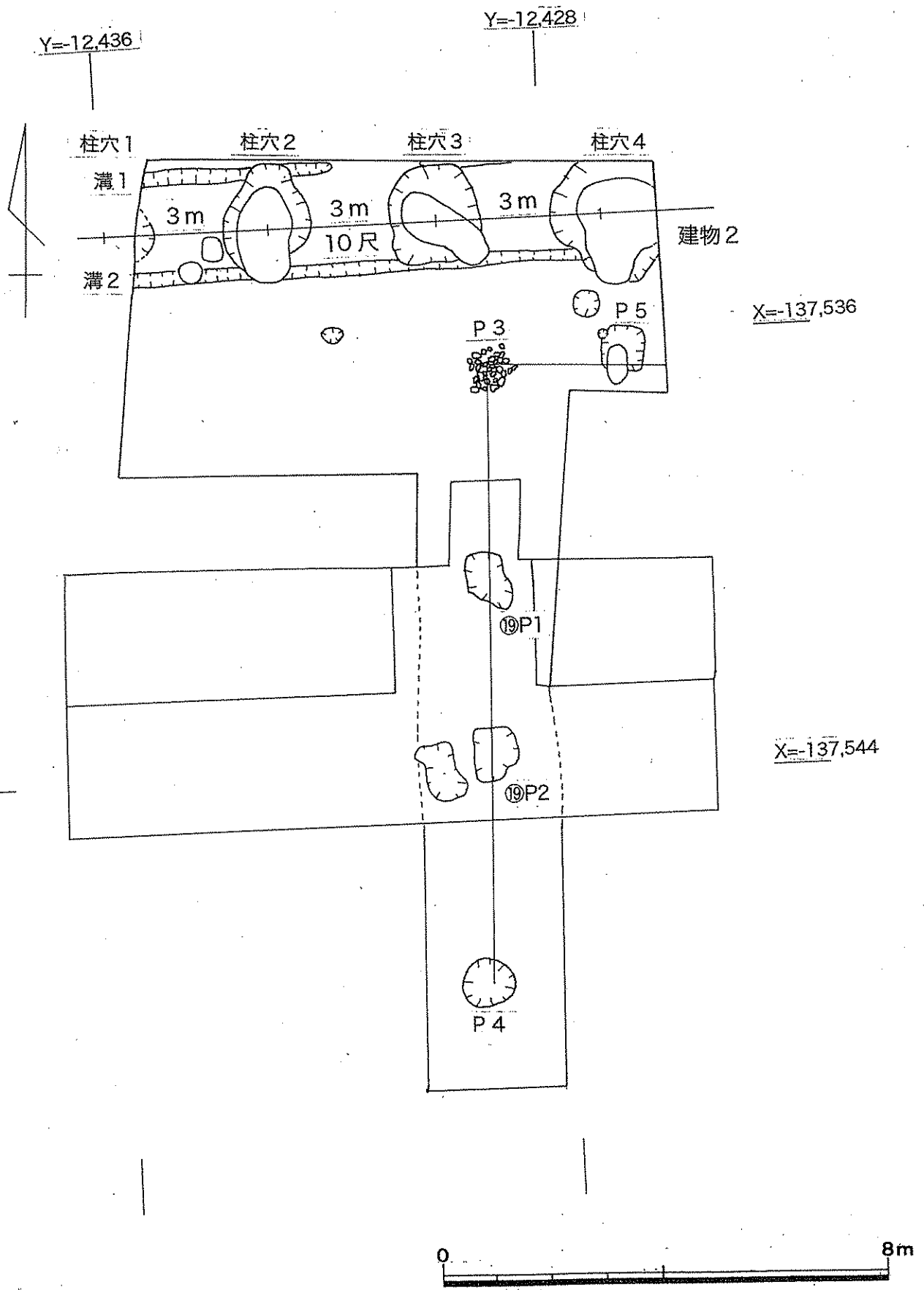
これまでの調査で、「朝堂院地区」では、東西と南側を区画する板塀（掘立柱塀）の一部と、南の門（朝堂院南門）が見つかっていましたが、高位の役人が出仕する建物である「朝堂」は確認されていませんでした。なお、『続日本紀』には天平16(744)年の正月元旦に朝堂に官人を集めたという記載があります。

今回の調査では、東西に約3.0m(10尺)の間隔で並ぶ柱穴4基(建物2)を確認しました。柱穴の南北両端には、平行する2本の溝が掘られています(溝1・溝2)。このような溝は他の都では見つかっていませんが、柱穴を掘る時の計画線の役割をもった溝だと考えられます。

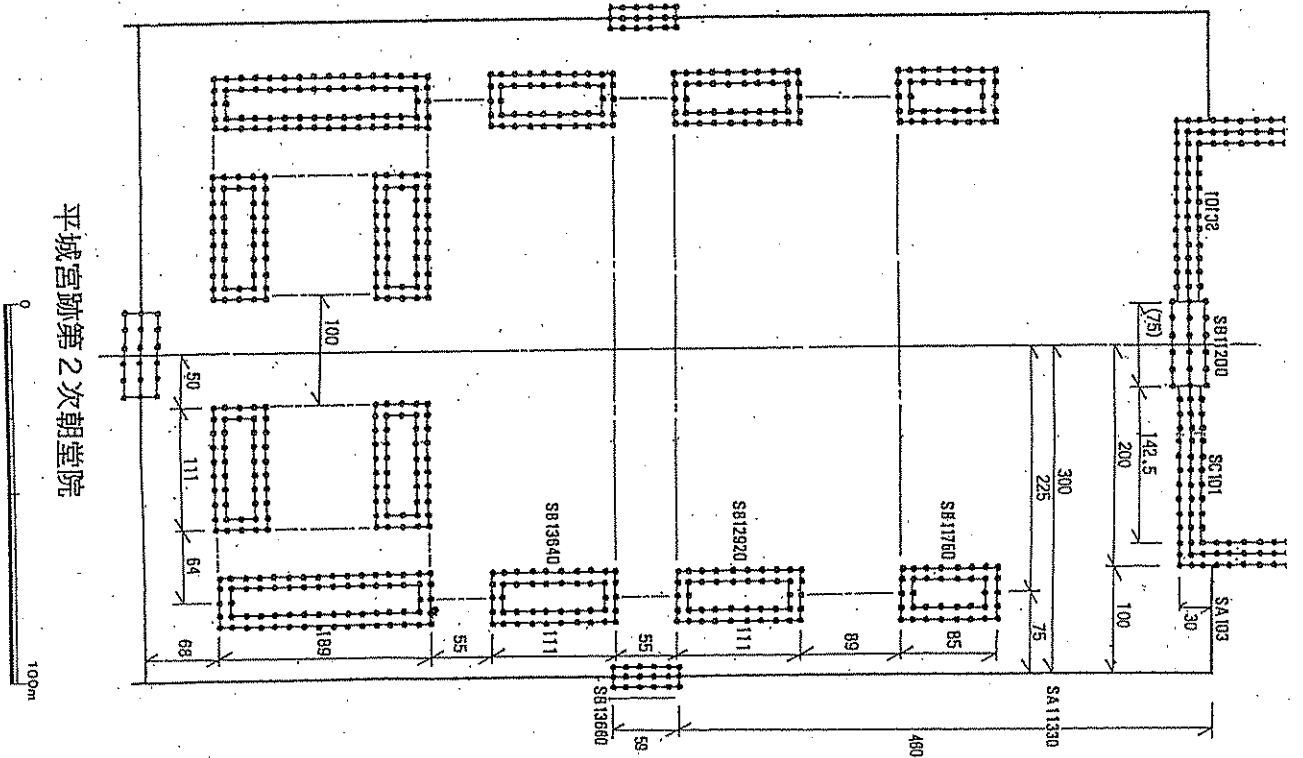
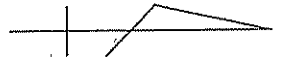
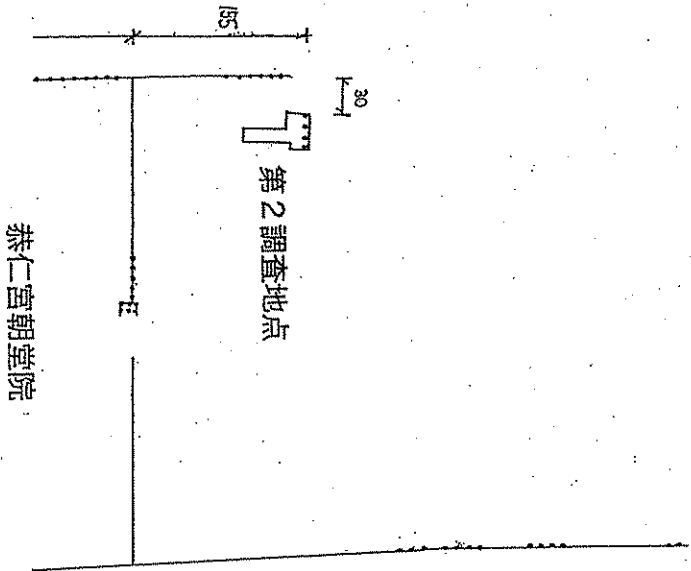
柱穴はいずれも不整形な円形をしており、柱穴には柱を抜き取った痕跡がありますので、礎石を使わない掘立柱建物だった可能性があります。柱穴1つの大きさは径が1.5~1.7mほどの大きさです。この大きさは、これまで見つけていた板塀（掘立柱塀）の柱穴が1.0m前後だったことと比較して大変に大きなもので、朝堂の建物の一部が見つかったものと判断しています。また、この調査区では、全く瓦が出土しませんでした。このことから、朝堂は瓦葺きの建物ではなかったと想像されます。

朝堂の発見は、恭仁宮では初めてのことです。今回の調査で見つかったこの柱穴の大きさは、恭仁京以前の平城京の朝堂で見ついている柱穴ともほぼ同じ大きさであることから、恭仁宮の朝堂も平城宮と変わらない大きさのものが建てられていた可能性が高まりました。このことは、恭仁京は足かけ5年と短命な都でしたが、朝堂など宮の重要施設については整備が進んでいたことがわかりました。

朝堂は平城京では12堂、難波宮では8堂が配置されていたことがわかっています。恭仁宮ではまだ建物の一部が見つかったばかり、朝堂の建物そのものの大きさや、全体にいくつの堂が存在したのか、またその配置はどうなっていた



第5図 第2調査地点遺構平面図 (S=1/100)



第6図 恭仁宮跡と平城宮跡第2次の朝堂院の比較 (S=1/2,000)

のかなど、解明しなければならないことが多くあります。来年度以降、この建物の規模や構造については、引き続き調査を行うことで明らかにしていく予定です。

○第3調査地点

「大極殿院地区」と「朝堂院地区」の境界付近で調査を行いました。この地点は、現時点の想定では朝堂院地区の板塀（掘立柱塀）が見つかる場所になりますが、これまでの複数回の調査でも見つけることができていません。

今回の調査では、これまで見つけることができなかった朝堂院の推定ラインではなく、大極殿院の推定ラインを南へ延長した地点で調査を実施しました。しかし、今回も宮を区画する塀を見つめることはできませんでした。

塀が見つからない理由としては、後の時代に削られてすでに失われてしまっている可能性が考えられます。この点も今後の調査によって明らかにしていく予定です。

おわりに

今回の調査では、大極殿院後殿の建物と思われる柱穴と、朝堂の一部と考えられる柱穴を見つめることができました。

大極殿院後殿に関する建物は、後世の耕作などで失われた部分が多くありましたが、その存在の手がかりが見つかったことは一つの成果と言えます。

また、これまで『続日本紀』には記載されていましたが、見つかっていなかった朝堂が発見されたことは非常に重要な成果です。今回の調査では、朝堂の柱穴4基を見つめることができました。特に重要なことは、柱穴の規模が平城京と変わらない大きさであることがわかったという点です。今回の朝堂の発見により、恭仁京は足かけ5年と短命な都でしたが、朝堂など宮の重要施設については整備が進んでいたことがわかりました。

朝堂の建物そのものの大きさや、全体にいくつの堂が存在したのか、またその配置はどうなっていたのかなど、これから明らかにしていかなければならない点が多く残されていますが、今後それらの課題を解決すべく調査を進めていく予定です。

最後になりましたが、今回の調査に際し、調査に参加していただいた皆さん、
各方面から御指導、御協力いただいた方々に、深く感謝いたします。
